

フォンターネとクヴィッツォー家

河合 まゆみ

Abstract

Theodor Fontane erwähnte schon in seinem Schottland-Buch „Jenseit des Tweed“ (1860) die Quitzows, eine der alten märkischen Adelsfamilien. Doch erst im Jahr 1887 besuchte er den Quitzow-Herrensitz und verfasste danach das Kapitel „Quitzwöwel“ in seinem Werk „Fünf Schlösser“, das man heute als den fünften Band der „Wanderungen durch die Mark Brandenburg“ betrachtet. In diesem Kapitel erzählt Fontane die Geschichte der Quitzows, vor allem beschreibt er darin die sogenannte Quitzowzeit, die die Zeitspanne zwischen 1400 und 1410 umfasst. Fontane versucht dem in der damaligen Geschichtsschreibung üblichen Vorurteil entgegenzutreten, welches die Quitzows als Raubritter und Landesverräter gegenüber dem Burggrafen Friedrich betrachtete. Von den damaligen Spezialhistorikern, Adolph Friedrich Riedel und Georg Wilhelm von Raumer, entscheidet sich Fontane für die Ansichten des Historikers von Raumer, der das Handeln der Familie Quitzow rechtfertigte.

Unmittelbar nach Fontanes Bucherscheinung „Fünf Schlösser“ wurde auch das vaterländische Drama von Ernst von Wildenbruch „Die Quitzows“ im November 1888 mit großem Erfolg aufgeführt. Damit bekam das Thema „Die Quitzows“ die von Fontane gewünschte, öffentliche und wohlverdiente Aufmerksamkeit. In Fontanes Roman „Die Poggenpuhls“ (1896) spielt auch Wildenbruchs Drama eine wesentliche Rolle. Fontane setzt sich in diesem Werk wieder mit dem preußischen Adelstand und darunter auch mit den Quitzows literarisch auseinander.

Schlüsselwort: Theodor Fontane, die Quitzows

はじめに

1860年のフォンターネの初期の紀行文には、すでにクヴィッツォーの名前が重要な意味を持って登場しているが、フォンターネがクヴィッツォー家の歴史とその評価に正面から取り組んだのは意外に遅く、1888年刊行の『五つの城』においてである。同年、劇作家ヴィルデンプルッフの歴史悲劇『クヴィッツォー兄弟』がベルリンで上演され、大成功を収めた。劇評家としても活躍していたフォンターネは、このヴィルデンプルッフの劇作を通して、ふたたびクヴィッツォーの歴史的评价と向き合うことになった。

本稿では、『五つの城』の「クヴィッツェヴェル」章を中心に、ヴィルデンプルッフ作『クヴィッツォー兄弟』についての批評、さらに作者晩年の中編小説『ポッケンプール家』を詳しく分析することで、フォンターネがクヴィッツォー家、正確に言えば、クヴィッツォー兄弟とその時代を歴史的にどのように評価していたのかを考察していく。

1. フォンターネのクヴィッツォー家への関心

クヴィッツォー家は、マルク・ブランデンブルクの古い貴族の家門である。15世紀初頭、ブランデンブルクの勢力図は非常に複雑で、隣接する諸侯や司教たちとのいざこざ、戦闘が絶えなかった。そのような無秩序状態のなかで、土着貴族クヴィッツォー家が台頭してくる。フェーデ (Fehde) による戦闘、婚姻、あるいは売買などによって、戦略上重要な城砦を次々と獲得していったクヴィッツォー家は、ブランデンブルクにおける一大勢力となり、とくにディートリヒ (Dietrich) とヨハン (Johann) の兄弟のもと、一族は栄華を極め、この時代は「クヴィッツォー時代」(Quitowzeit) と呼ばれる¹⁾。しかし1411年にマルク伯ヨープスト (Markgraf Jobst von Mähren) が死去すると、国王ジギスムント (König Sigismund) はニュルンベルク城伯フリードリヒ (Burggraf Friedrich von Nürnberg) を代行統治者として任命し、1412年にフリードリヒがマルクにやってくる。クヴィッツォー一派はフリードリヒに忠誠を誓うことを拒否し、両派は戦闘状態に入るが、1414年、クヴィッツォー家の拠点であるフリーザック、プラウエの両城砦がフリードリヒの軍勢の前に陥落し、勝敗が決した。フォンターネの時代、一般的な歴史認識では、マルク・ブランデンブルクにおけるホーエンツォレルン家の最初の統治者となったブランデンブルク選帝侯フリードリヒ1世の功績と人柄が称えられ、一方でフリードリヒに反抗し、打ち負かされたクヴィッツォー兄弟は反逆者、とりわけ「盗賊騎士」(Raubritter) という悪名高きレッテルを貼られていた²⁾。

フォンターネの著作をさかのぼると、かなり以前からクヴィッツォー家に関心を持っていたことがうかがえる。ロンドン滞在中の1858年夏、フォンターネは長年の友人と連れ立っ

て念願のスコットランド旅行に出かけた。この旅の途上でフォンターネは『マルク・ブランデンプルク周遊記』（„Wanderungen durch die Mark Brandenburg“）（以下略『周遊記』）の執筆を決意したと後年述べているが、旅の様子をつづった旅行記『トゥイード川のかなた』（„Jenseit des Tweed“）のなか、「エディンバラからスターリング」章において、クヴィッツォーが言及される。フォース川を上っていく蒸気船の船上で、周囲の風景を楽しみながら、フォンターネは故郷のハーフェル川のことを思い出す。作者のマルク貴族観を知るうえで重要な手がかりとなる箇所なので、以下に引用する。

どの国にも、どの地方にも男たちはいる。しかし、いくつかの土地に神はことさら恩恵を施された。… そのような場所が、ハーフェル川がその青い腕をまわす島のような形の地域である。そこは、プロイセンが生まれ育った健全な核である。… このハーフェルが形成する島のちょうど真ん中にフェーアベリーンがあるのは非常に意味深いことだ。そのの戦場でプロイセン王家は築かれたのだ。この島は、なんと歴史的な土壌であることか。そこを形成する川の岸辺にそって、あの古い一門らが居を構えていた（そして今もそうである）が、彼らはクヴィッツォーのころから、才能よりも気骨を重んじてきた。彼らの頑強さ、自尊心は、結局われわれ自身の本質の典型に過ぎないのだが、それらをわれわれはあこがれよりも尊敬の念をもって見つめることに慣れるべきであろう。³⁾

そして、そのような古い一門として、作者は、なみいるプロイセンの英雄の中でもっとも人々から愛されているツィーテン（Hans Joachim von Zieten）や、ナポレオンの野望を打ち砕いたクネーゼベック（Karl Friedrich von dem Knesebeck）の名前を挙げる。帰国後、マルク地方への踏査を始めるや、フォンターネはこの両者ゆかりの地を訪れ、『周遊記』の第1巻『伯爵領ルピン』で取り上げている。かたやクヴィッツォーについては、『周遊記』の第3巻『ハーフェルラント』で、クヴィッツォーの居城クヴィッツェーヴェルを取り上げるかどうかが思案されたはずであるが、結局、「レーニン修道院」章のなかの一節で、クヴィッツォー時代に修道院は税金や利権の問題でクヴィッツォー一族といざこざが絶えなかったこと、フリードリヒがマルクに来るや、修道院はその側について戦ったことが短く述べられるにとどまった。1882年になって、フォンターネは、クヴィッツェーヴェルの現所有者であるフォン・ヤーゴウ（Eugen von Jagow）と熱心に手紙のやり取りをして、訪問の約束もしていたようであるが⁴⁾、実際に訪問が実現したのは1887年5月末になってからであった。同年7月には「クヴィッツェーヴェル」章の執筆を開始し、9月には完成、10月から翌年1月にかけて雑誌で前掲載された。また、紀行文だけでなく小説作品にもクヴィッツォーは登

場するが、これに関しては後に詳述する。

2. 『五つの城』 („Fünf Schlösser“) の「クヴィッツェーヴェル」章

2.1. 『五つの城』の成立

フォンターネが『周遊記』執筆への最初のインスピレーションを得たのは、前述のように1850年代後半のイギリス滞在時のことであった。ベルリンに戻ってから、1859年、マルク地方への踏査を開始し、その後、30年以上の長きにわたって、様々な雑誌に旅行文を発表し続けることになる。1862年から1881年まで、それらをまとめた『周遊記』が4巻まで刊行された。この『周遊記』はその後、版を重ねるたびに訂正、変更を繰り返され、1892年に初めて4巻の全集版として発売された。第1巻『伯爵領ルピン』 („Die Grafschaft Ruppin“), 第2巻『オーダーラント』 („Das Oderland“), 第3巻『ハーフェルラント』 („Havelland“), 第4巻『シュプレーラント』 („Spreeland“) である。

1888年(奥付上は1889年)に刊行された『五つの城』は、『周遊記』の続編という内容ではあったが、作者の生前、『周遊記』の5巻目として全集版に収められることはなかった。『五つの城』の前書きで、フォンターネは、『周遊記』との類似性と相違を以下のように述べている。

この本を『周遊記』の続編と簡単に呼んでしまうか、あるいは『周遊記』に直接組み込んでしまうことは、あらかじめよく考えられたうえで回避された。なぜなら、すぐに分かる類似性にもかかわらず、しかし、著しい相違もまた明らかになるからである。『周遊記』では … 私はいつも出掛けて、動き回っていたが、前もって行程を決めずに、気の向くままが一番であった。だがこの本ではすべてが違っている。もし私が『周遊記』をおそらく雑文や随筆と称してよいのであれば、この『五つの城』は、同様に多くの歴史的、専門的な著作、エッセイから成っていて、それらを書くにあたって、私は、より豊かな素材を手に入れるため、それ以上により良い雰囲気を探求めて、たんに歩き回るのでなく、計画された旅行をしたのだった。(7)⁵⁾

なお『五つの城』は、今日、フォンターネ研究、ひいては関連書籍の出版においても、『周遊記』の5巻目という扱いをされている。

2.2. 歴史的エッセイとしての「クヴィッツェーヴェル」章

『五つの城』はその題が示すように、それぞれの城を取り扱った五つの大きな章から成る。

これらの五つの城は、フォンターネ自身が述べているように、城 (Schloss) というよりはむしろ領主の館 (Herrensitz) と称したほうがふさわしい⁶⁾。以下では、その第1章「クヴィッツェーヴェル」を取り上げる。クヴィッツォー家の居城であったクヴィッツェーヴェル城を訪れた作者は、冒頭、クヴィッツェーヴェルの村や城の描写もそこそこに、15世紀初頭のいわゆる「クヴィッツォー時代」に話を向ける。この時代を、「マルク地方の歴史の中で最も興味深い時代の一つ、いや、おそらく最も興味深い時代」(11) であると主張する作者は、まずこの時代を共に生きた年代記作家ヴスターヴィッツ (Engelbert Wusterwitz) の名前を挙げる。さらに、彼の記録をもとに、ラウマー (Georg Friedrich von Raumer)、リーデル (Adolph Friedrich Riedel)、クレーデン (Karl Friedrich Klöden) ら当代の著名な歴史家たちがこの時代を研究し、著作をなしていることも指摘する。それにもかかわらず、この「クヴィッツェーヴェル」章で再度、この時代を取り上げようとする意義を、いささか謙虚に以下のように述べている。

にもかかわらず、ここで再度、クヴィッツォー時代を描き出そうという試みがなされるとするならば、それは何か新しいこと、歴史研究の立場から見ても公表すべき新しいことがあるからではなく、些細な、もっと悪いことに、しばしば違いのない細部に窒息している素材を見通しがきくように作り上げ、より大きな明瞭さと集中でその劇的な効果を高めるという意図があつてにすぎない。(11f.)

フォンターネの時代、とくにドイツ帝国成立後の一般的な歴史解釈では、クヴィッツォーが悪、フリードリヒが善という一方的な図式化が成り立っていた。クヴィッツォー一派の残虐な強奪行為ばかりが強調され、対してホーエンツォレルン君主のフリードリヒの人間性が美化されていた。フォンターネは歴史的資料を正確に引用しながら、クヴィッツォー時代を別の角度、より公正な立場から描き出そうとしている。新しい資料を発見、提示してみせるのではなく、膨大な資料を前に、複雑な部分を思い切って整理し、また無視されてきた部分に注目し、人間としてのクヴィッツォー兄弟に光を当てようとしている。つまり、フォンターネがこの章で目指しているのは、クヴィッツォー時代の再構築であるといえる。

2.3. クヴィッツォー兄弟の繁栄と没落

「クヴィッツェーヴェル」章において作者は、ディートリヒとヨハンのクヴィッツォー兄弟とその盟友カスパー・ガンス (Casper Gans zu Putlitz) の三人の生涯に焦点を合わせている。この章はさらに15の小さな章から成るが、そのうちの13章を、クヴィッツォー兄弟の誕生から死までにあてている。クヴィッツォー兄弟が幼少の頃よりどういう日常の中で成長

したのか、一般的にあまり注目されない二人の下の弟コンラート (Conrad) とヘニング (Henning) の誕生をも含め、フォンターネは達者な筆運びで14世紀末のマルク地方の大小の出来事を描き出していく。ここで付け加えておくと、この時代は絶え間なく戦いが続いたが、フォンターネはそれらの戦いの直接の描写を避け、かわりに、民衆の間に伝わるバラードや民謡を引用してみせる。フォンターネによれば、この地域は歴史的バラードの宝庫であり、イギリス・スコットランドのバラードに負けるとも劣らないと非常に高く評価している。

クヴィッツォー兄弟の人間的な面を描き出そうとしたフォンターネが、なかでも大きく取り上げて詳述しているのが、兄弟の婚礼と彼らにまつわる洗礼の祝いであり、これらの出来事をクヴィッツォー時代の決定的なターニングポイントと位置付けている。1394年7月、長兄ディートリヒの結婚式がベルリンで盛大に執り行われた。結婚式当日の描写だけにフォンターネは2頁も割いている。6年後の1400年8月には、次兄のヨハンが同じく盛大な結婚式を催したが、こちらは結婚式の詳細は省かれ、その政治的な意味合いの考察に頁が割かれている。この結婚、つまりマルク地方の名門ブレドー家との縁組は、クヴィッツォー兄弟にとって願ってもないものであり、この結婚をもってしてクヴィッツォー時代が始まったとフォンターネは見る。ヨハンは結婚によって義父ブレドー (Lippold von Bredow) からプラウエ城を譲り受け、このプラウエ城の獲得こそが「兄弟の人生にとって決定的な瞬間」(29) であったと作者は述べている。

フォンターネによれば、兄弟のうち、たんに年上というだけでなく、政治的な駆け引きにも優れたディートリヒが、弟の結婚式からの帰途、それまでは夢物語に過ぎなかったマルク地方の統治者になるという考えを、はじめて現実味を帯びたものとしてとらえなおしたのではないかと推測される。フォンターネの分析によれば、ディートリヒの政治的優位は、当時マルクの支配者であったマルク伯ヨープストのお気に入りであったことであり、また軍事的には、マルク地方の両翼と中央を手中にしていたことにあった。

こうしてヨハンの結婚を機に幕を開けたクヴィッツォー時代の10年間、際限のない襲撃や占拠の混乱を整理してみせるのは、「絶対に不可能ではないにしても、非常に困難で、割の合わない企てであると見なされる」(32) うえに、上手くいったところで「読者の忍耐力試し」(32) になるのが落ちであるとし、作者は詳しく立ち入ることはしていない。それでも、1410年までにクヴィッツォー兄弟が手に入れた多くの町や城、砦を正確に列挙してみせ、そのオーダー川とエルベ川の間広がる勢力図は、北ドイツ諸侯にとっては「マルク貴族の反抗心とエネルギー」(33) を恐れるに十分なものであったとしている。

フォンターネは1400年から1410年までの10年間をクヴィッツォー兄弟の繁栄期、いわゆる「クヴィッツォー時代」とし、1410年をその絶頂期としている。そして注目すべきは、

クヴィッツォー時代を「ほかに例を見ない、小さいものを大きいものと比較することを許されるなら、ナポレオン時代を思わせる成功の時代」(31)とまで称していることである。そのような比較は、一見突拍子もなく見えるかもしれないが、たとえば、1391年のクレーツケ城でのクヴィッツォーの勝利から1414年の決定的敗北までの「クヴィッツォーの悲劇」と、1793年トゥーロン攻防戦での活躍から1814年の失脚までの「ナポレオンの悲劇」とを比べてみると、偶然とはいえ、重要な戦いの年号が400年違いで奇妙に重なることがわかる。さらに作者は、ワートルローでの敗北後のナポレオンの姿と、フリードリヒに敗北、逃走したディートリヒのその後の姿とに、何か似たもの、おそらく失ったものをあきらめきれない敗者の苦しみを見出している。

さらに興味深いのは、都市ベルリンとクヴィッツォー家との関係に言及した際、フォンターネは、注釈においてではあるが、ビスマルクを引き合いに出していることである。のちにフォンターネは、友人への手紙の中で、かつてのマルク貴族の典型といえるディートリヒが「まだ存命中の偉大な典型」⁷⁾であるビスマルクをつねに想起させると、この二人をはっきりと結びつけて書いている。

一方で、クヴィッツォー兄弟の絶頂期である1410年に、一族の没落の予兆がすでに見出されることをフォンターネは指摘する。当時、クヴィッツォー陣営では二つの洗礼が相次いだ。まず、1410年8月5日フリーザック城でのディートリヒの子供の洗礼である。すでに3日前には招待者がフリーザック城に集まったが、まさに錚々たる顔ぶれであった。とりわけ式に重みを添えたのは、クヴィッツォー兄弟4人が勢ぞろいしたことであった。フリーザック城での洗礼式を終えた一同は、8月7日にはタンゲーミュンデ城へ向けて出立した。そこで行われる盟友カスパー・ガンスの子供の洗礼に出席するためである。フォンターネは、その華々しい行列や、それに続く8月8日の洗礼の祝賀の様子を、後の悲劇が際立つよう、食卓に供された食事にいたるまで詳細に描き出してみせる。翌9日にクヴィッツォー一族は帰途に就くが、エルベ川の舟渡場で船が転覆し、コンラートが溺死してしまう。共に溺れた従者の遺体は見つかったが、コンラートの遺体はついに見つからなかったそうである。歴史に名を馳せる二人の兄と違って、人々から好かれる存在であったコンラートの悲劇的結末を、フォンターネは、なにか運命的なもの、兄弟の人生における繁栄から没落への転換点と見なしている。

フォンターネに特徴的なのは、一族の没落を兄弟自身の責任に帰していないところである。クヴィッツォー兄弟の没落の発端は、1411年1月、兄弟の庇護者であったマルク伯ヨープストの死であり、これにより国王ジギスムントが再びマルク・ブランデンブルクを統治することになった。人々は、ジギスムント本人がマルクへ来るか、あるいはマルクの貴族、すなわちクヴィッツォー一派から代行統治者を選ぶものと楽観視していたが、再び異国人を代

行統治者とする国王の意向が伝えられる。これは、クヴィッツォー一派には受け入れがたいことであった。6月にニュルンベルク城伯フリードリヒが新しい統治者に任命されてマルク地方にやってきたが、クヴィッツォーはじめ一部の貴族はフリードリヒへの忠誠を拒否した。そしてクヴィッツォー兄弟が最後までフリードリヒに抵抗し続けた理由を、作者は、「自分の自由な判断で行動し、上位の権力には望む以上に支配されたくないという志向がクヴィッツォー兄弟のなかに深く根付いていた」(51)からとしている。

1414年2月のフリーザック城とプラウエ城の陥落に至るまでのクヴィッツォー陣営とフリードリヒ陣営との駆け引きと戦闘に関して、フォンターネは非常に客観的な描写にとどめている。フリードリヒの外交的な駆け引きに重点が置かれ、個々の戦いには立ち入っていない。そこにフリードリヒの神聖化は認められず、あえて挙げれば、闘いで戦死したフランケン地方の騎士たちをフリードリヒがねんごろに弔ったことを指摘していることくらいである。かわりに、フリードリヒの勝利をたたえた長いバラードを引用している。しかし同時に、このバラードの作者を「ホーエンツォレルン家の最初の宮廷詩人」(61)と称して、ビクトリア女王に賛歌を捧げた英国詩人テニスン (Alfred Tennyson) と皮肉まじりに比較してみせている。

フリードリヒによってマルクが平定された後、もはや一般に関心を払われることのないクヴィッツォー兄弟のその後もフォンターネは注目している。フリーザック城陥落の際も捕虜になることなく逃亡に成功し、その後、隣接諸侯の傭兵隊長として最後までフリードリヒに抵抗し続け、最後は妹のもとに身を寄せ、失意の中で亡くなった長兄ディートリヒに対して、次兄のヨハンは、プラウエ城陥落の際に捕虜となり、2年間の幽閉ののち釈放され、フリードリヒと和睦し、領地を返還されている。一方で、兄弟の盟友カスパー・ガンズは、かなり早い時期にブランデンブルク司教に捕えられたため、クヴィッツォー対フリードリヒの戦いに加わることができなかった。結果的にこれが反乱軍の戦闘力を半減させ、勝敗が決したため、フリードリヒも早々に彼を許している。なおカスパー・ガンズは、その後、近隣諸侯との戦いで、フリードリヒの勝利に大いに貢献している。次兄ヨハンと盟友カスパー・ガンズについていえば、新しいマルク君主フリードリヒへの忠誠は本心からのものであったと、作者はこの二人の名誉回復を図っている。

2.4. フォンターネの歴史の見解

クヴィッツォー兄弟の生涯をその誕生から最期まで詳しく辿った後、フォンターネは、クヴィッツォー兄弟の行為の正当性を問うている。マルク・プロイセンの歴史叙述においては、「クヴィッツォー兄弟を国賊、山賊、あるいは盗賊とみなす古くからの、ほとんど宗教的な慣習」(71f.)があり、リーデルのような卓越した学者までもがこのような見解に与し

ているとする。そして、そのような偏見に反対し、クヴィッツォー兄弟を盗賊、反逆者として一方的に非難することは不当であると主張したのがラウマーであるとして、この二人の学者の説を比較し、最後に後者の方を正しいと結論づけている。その理由は、以下のとおりである。

彼 [=ラウマー] は歴史叙述家のまなざしを持っていて、大きな出来事を理解しているのに対し、リーデルの立脚点は、自由なまなざしを持つのに十分なほど高くはなく、そもそも彼を歴史家に数えていいものか疑わしい。素晴らしい研究者であることは、必ずしも歴史家であることを意味しない。ラウマーは描かれる時代からすべてを観察しているが、リーデルはすべてを自分自身の時代からしか見ていない。(80) [] は筆者注

しかし国民感情はリーデル側にあり、これは当分変わることはないであろうとフォンターネは予見する。フォンターネにとって、後世の人々がクヴィッツォーに下した有罪判決は、不当ではあるが、理解できるものであった。問題は、まず、クヴィッツォーかホーエンツォレルンかという誤った問題設定にある。フリードリヒの勝利は、国と国民にとって、大きな祝福となったことは間違いないが、だからといって、当時、クヴィッツォーがフリードリヒに反抗したことが不当であるとはならない。第二に、マルク地方における何世紀にもわたっての貴族と市民との敵対関係が、反クヴィッツォーの感情をあおってきた事実をフォンターネは指摘する。マルク地方の歴史を記述するならば、市民的な反貴族主義を克服し、より高い視点に立たなければならないとしている。

フォンターネにとっては、そもそも、上記のようなクヴィッツォーへの公正な歴史的評価を下すことが、「クヴィッツェーヴェル」章の目的だったのではなかろうか。そしてこの点において、フォンターネは、クヴィッツォーを取り上げた同時代のほかの作家たちとは明らかに一線を画している。ある意味、読者の感情に逆らうことを承知で、クヴィッツォー側に立ったともいえる。フォンターネは、1893年の友人に宛てた手紙で、『五つの城』について以下のように書いている。

私はその巻を、『周遊記』の巻よりも、より成熟した、より良いものと見なしています。たとえ読者が違った判断を下そうとも、私の判断は変わりません。⁸⁾

3. ヴィルデンプルッフの歴史劇『クヴィッツォー兄弟』 („Die Quitzows“) との関係

3.1. フォンターネの『クヴィッツォー兄弟』評

『五つの城』の刊行後、その5つの章の中でも、とりわけ「クヴィッツェーヴェル」章が世間の注目を集めることになった。その理由は、当時人気の劇作家ヴィルデンプルッフの歴史劇『クヴィッツォー兄弟』の上演と時期的に重なったためである。時間順に説明すると、「クヴィッツェーヴェル」は1887年10月から1888年1月にかけて雑誌で前掲載され、1888年10月中旬に『五つの城』として刊行された。一方、ヴィルデンプルッフの劇作品『クヴィッツォー兄弟』は1888年11月9日に王立劇場で初演され、大当たりをとった⁹⁾。フォス新聞の劇評家として、フォンターネは、それまでのヴィルデンプルッフの劇作品を厳しく評価してきたが、『クヴィッツォー兄弟』に関しては、一転して、上演後、好意的な評価を下している。

1871年のドイツ帝国成立後、ホーエンツォレルン王家への関心が、ブランデンブルク・プロイセン以外の地域でも、とくに市民階級において高まったことを受けて、最初のホーエンツォレルン君主フリードリヒとクヴィッツォー兄弟との戦いは、たびたび文学作品の素材となってきた。その際、歴史的資料として必ず用いられたのが、クレーデンの『クヴィッツォー家とその時代』 („Die Quitzows und ihre Zeit“) という4巻本である¹⁰⁾。クレーデンは、自由のためなら残虐な行爲もいとわないクヴィッツォー兄弟に対して、フリードリヒの高貴な人間性をほとんど神格化し、ホーエンツォレルン家によってマルク地方の新しい時代が始まったとしている¹¹⁾。ヴィルデンプルッフの『クヴィッツォー兄弟』もこのクレーデンの本から多くを引き継いでいる。ヴィルデンプルッフの作品は、とくにその終盤において、ホーエンツォレルン家初のブランデンブルク選帝侯フリードリヒ1世を理想の支配者として描き、称えているが、作品の前半はディートリヒを前面に押し出し、またベルリン市民に活躍の場を与えてもいる。フォンターネが高く評価しているのも、まさにこの部分である。フォンターネの劇評を詳しく見ると、「クヴィッツェーヴェル」章とのつながりにおいて特に注目すべき点が二つある。

まずフォンターネは、ヴィルデンプルッフの素晴らしい思いつきの例として、鍛冶職人ケーネ・フィンケという登場人物を挙げている。この人物は、ケッツアー・アンガーミュンデの戦いを称えた古いポンメルン地方のバラードの最後の節にその名前が出てくる。そこからインスピレーションを得て、「陽気で、はつらつとして、作品にうまくかみ合っている」¹²⁾ フィンケという登場人物を作り上げたヴィルデンプルッフの創造力をフォンターネは称賛している。ケッツアー・アンガーミュンデの戦いでは、カスパー・ガンスの活躍がフリードリ

ヒを勝利に導いており、まさに同じバラードをフォンターネも「クヴィッツェーヴェル」章で引用していたのだった。

次に、「クヴィッツォーという素材」¹³⁾について述べているところが目を引く。この素材はだれもが扱える代物ではないとして、以下のように、自身の経験に基づいてヴィルデンプルッフを高く評価している。

もし占い棒を片手に、枯野を歩き、突如、ここが源泉だと断言できる源泉探しがいるとすれば、ヴィルデンプルッフもまた、クヴィッツォーの歴史に取り掛かるや、源泉がどこかを、そこを少し掘り下げれば水が湧き出るような場所を、すぐにも発見したはずである。詩人の成功した関与を評価するためには、あの時代の歴史についてある程度は精通していなければならない。いつもいつもシュトラウスブルクだ、リーベンヴァルデだ、ポンメルン公だ、ザクセン公だ … 騎士の義務だ、フェーデの権利だ … ばかりでは退屈極まりない。しかし、そのような慰めのない泥沼の藪の中で、ヴィルデンプルッフは迷わなかった。少なくとも、彼はその中にはまったきりにならず、まさに輝かしい除外する技術を行使することで、この広大な混乱をいくつかの線と点に立ち返らせることができたし、それによって最初の2幕で、とりわけ第2幕で何かを成し遂げることができたのだった。¹⁴⁾

上記で述べられた内容は、そのままフォンターネが「クヴィッツェーヴェル」章で目指したことに他ならない。そしてフォンターネが称賛した劇の第2幕では、ディートリヒが、ベルリン市長も認める気骨ある戦士、なによりも自由をもとめる誇り高い勇者として描かれている。

3.2. フォンターネの『ポッゲンプール家』 („Die Poggenpuhls“)

フォンターネが歴史上のクヴィッツォー時代を、さらにはヴィルデンプルッフの劇作品『クヴィッツォー兄弟』をどう評価していたのかを再確認するうえで大きな手掛かりとなるのが、90年代に成立した中編小説『ポッゲンプール家』である。ベルリンに暮らす斜陽貴族のつつましい日常をたんとと描いただけのこの小説は、筋書きといえるものがほとんどなく、作者自身が述べているように、Was (何を) よりも Wie (いかに) を重視した作品といえる¹⁵⁾。タイトルにもなっているポッゲンプール家とは、今は未亡人となっているフォン・ポッゲンプール少佐夫人と5人の子供たち、そして未亡人の義兄に当たるエーバーハルト伯父であり、これが作品の主だった登場人物でもある。市民出のポッゲンプール夫人は3人の娘たちテレゼ、ゾフィー、マノンとベルリンで貧しいながらもなんとか貴族としての

体面を保った年金生活を送っている。唯一の経済的な頼りと目されているのが、シュレージエンの裕福な貴族の未亡人と結婚したエーバーハルト伯父である。作品は1月のポッゲンプール夫人の誕生日から始まる。家族が誕生祝いに訪れ、作品の前半、15章中9章までが誕生日とその翌日の描写に終始している。それに対して作品の後半は、その年の9月の伯父の死をめぐって展開する。舞台はシュレージエンのアードムスドルフへ移り、エーバーハルト伯父の埋葬が描かれる。結果的に伯父の遺産が舞い込むことで、ポッゲンプール一家の経済状況が改善されるというのが、この作品の筋書きと言えなくもない。

このような作品中、唯一、外の社会とのつながりを示す出来事が、ポッゲンプール夫人の誕生日に、エーバーハルト伯父が3人の姪と甥のレオを伴って、帝国劇場にヴィルデンブルッフの『クヴィッツォー兄弟』を観に行くことである。この観劇と、それにまつわるやりとりが、構成上も作品の中心をなしている¹⁶⁾。その場面を詳しく見ると、まず誕生祝いにやってきたエーバーハルト伯父と一緒にどこかへ出かけようと言い出す。するとレオが『クヴィッツォー兄弟』を提案し、しかも王立劇場の本物よりもモーリッツ広場のパロディーのほうを勧めるのだった。現実にも、ベーム (Martin Böhm) 作のパロディーが1889年4月よりエルドラド劇場で上演され、非常に人気を博しており、その事実をこうして劇中で指摘すること自体、フォンターネがヴィルデンブルッフに対して冷めた態度をとっていることがわかる。それにたいして、エーバーハルト伯父は、以下のように、パロディーはだめだと一蹴する。

いいや、レオ、そうはいかない。ふつうならそういうのを観るのは大好きなんだが。自分の名前にはそれなりに負うところがあるものだ。いいかね、ポンメルンにおけるポッゲンプール家は、大体がマルク地方におけるクヴィッツォー家のようなものだ。そうになると、連帯意識が邪魔をして、パロディなんかを楽しく観てられないものだよ。(513)¹⁷⁾

この「にせもの」にするか「ほんもの」にするかの議論は、ポッゲンプール家の信念にかかわる問題である。貧乏貴族の次男に生まれ、浅はかで、黄金の子牛を追いかけるレオは「にせもの」を好み、クヴィッツォー兄弟を「昔の同志」(514)と見なすエーバーハルト伯父は「ほんもの」にこだわる。しかし、ここでクヴィッツォー兄弟とその時代が作品中に持ち出されたことで、ポッゲンプール家が置かれた現状と、彼らが心のよりどころとする一家の歴史と伝統の実態が暴き出されることになる。

劇の中で、あるいは一般的にクヴィッツォー家が謀反人として扱われていることに対して、エーバーハルト伯父は以下のように評価する。

しかし、わたしが聞いた限りでは、ディートリヒ・フォン・クヴィッツォーのほうが、選帝侯フリードリヒよりもおもしろい人物になっているらしい。もちろん、いつもそうなるものなんだが。鉄の手甲で机をたたく者のほうが、昼間から説教を垂れる者よりおもしろいに決まっている。当時も今もそれは変わらないものだよ。(513f.)

市民出身のポッゲンプール夫人は、「あなた方貴族はいつもそうなんです。… すべてはホーエンツォレルン家のおかげなのに、階級の問題になると、きまって王家に反抗してみせるんですから。」(514) と、エーバーハルト伯父をたしなめるが、それこそが、クヴィッツォーの時代から引き継がれてきたマルクユンカーの誇りであり自尊心であった。エーバーハルト伯父は、『エフィ・ブリースト』の老ブリーストや『シュテヒリン湖』の老シュテヒリンと同様、作者が心を寄せた「古き良きマルク貴族」の典型として描かれている。そして、前述の『トゥイード川のかなた』の箇所でも指摘したように、クヴィッツォー兄弟、とくに長兄ディートリヒもまたその系列に連なる。さらに実在の歴史的人物というなら、マルヴィッツ (Friedrich August Ludwig von der Marwitz) をも挙げるべきであろう。『周遊記』の第2巻『オーダーラント』で取り上げられ、またフォンターネの処女小説『嵐の前』の老フィツェヴィッツのモデルともなった人物である。彼らが体现する「気骨」(Charakter) や「信念」(Gesinnung) こそ、フォンターネがマルク貴族に求めたものであった。

エーバーハルト伯父はクヴィッツォーの時代に思いをはせて、次のように言う。

このようなことはおそらく実際言うべきではないのだろうし、わたしもちょっと言ってみるだけなんだが、当時のほうがやっぱりよかったに違いないんだ。市民たちが、ベルナウ・ビールやコットブス・ビールをつくり、われわれがそれらを飲み干したものだ。万事がそうだったんだ。万事が今よりも威勢が良くて、愉快だった。市民にとっても同じだった。(514)

しかし、クヴィッツォーの時代はまさに遠い過去のことであり、また貴族の時代そのものが終焉に向かっていることをフォンターネは知っており、エーバーハルト伯父に、「われわれはもうだめだ。今はそう見えるものも、ちらちら燃え残っているにすぎないんだ。」(514) と言わせている。『ポッゲンプール家』の中で描き出されるヴィルヘルム時代のベルリンは、またそこでのポッゲンプール家の暮らしぶりは、クヴィッツォーの時代のそれとはまさに対極にあるといえる。

次に、作品中の登場人物たちの会話の中に、歴史劇『クヴィッツォー兄弟』についてのフォンターネの評価を探っていく。時間順に見ていくと、まず、エーバーハルト伯父は、ま

だ劇を見る前に次のように評している。

とてもいい芝居だっていうじゃないか。両方の陣営を正當に評価しているっていうだけでも十分だ。それがなんといっても難しいことだからね。(513)

この「両方の陣営を正當に評価する」というのは、まさに「クヴィッツェーヴェル」章でのフォンターネの信条であり、ここでのエーバーハルト伯父は作者の代弁者といえる。ただこれが戯曲『クヴィッツォー兄弟』にも当てはまるとはいえない。ヴィルデンプルッフの戯曲は、あくまでもホーエンツォレルン家によるブランデンブルク支配を称えるものであることを忘れてはいけない。

また観劇の最中で、エーバーハルト伯父はディートリヒをビスマルクそっくりだという。フォンターネは「クヴィッツェーヴェル」章の注釈で、ディートリヒとビスマルクを比較していた。ここではさらに踏み込んで、エーバーハルト伯父に次のように言わせている。

不思議な話だが、ビスマルクそっくりじゃないか。そのうえ、二人とも、偶然のなせる業か、隣り合ったところで生まれたときている。シェーンハウゼンからクヴィッツェーヴェルまでなら、空気銃でも弾がとどくだろう。(515)

さらに観劇の後、レストランで食事をしながら、エーバーハルト伯父は芝居の中のベルリン方言を疑問視してみせる。

さて、お前たち、芝居の中のベルリン方言はどうだったかい？ シュトラウスブルクの市民たちがやってきて、門番が彼らのほうを見張っていた場面からすでに始まったじゃないか。すべてが1411年ころの話だときている。(516)

それに対して、テレゼは、以下のように作者ヴィルデンプルッフを擁護する。

わたくし、思いますに、作者はホーエンツォレルン家の血筋の方ですもの、しっかりその方面の研究なさったことでしょう。ひょっとしたら、伯父さまがいぶかしく思われた言い回しや表現を、市参事会の古い書類のなかに見つけたのかもしれないわ。(516)

家族のなかで階級意識が一番強いテレゼらしい発言であるが、ここでヴィルデンプルッフの出自を持ち出すのはかなり皮肉に聞こえる¹⁸⁾。エーバーハルト伯父は、「おやおや、今話

されているベルリン訛りはまだ百年もたっていないし、20年もたっていないものもけっこうあるんだ。」(516)と、テレゼの擁護を看破する。ヴィルデンプルッフの『クヴィッツォー兄弟』がとくに市民階級に熱狂的に受け入れられた理由の一つは、作品中、大勢のベルリン市民が登場し、ベルリン方言をしゃべることであった。その疑問点を、ここでフォンターネは指摘してみせたのであった。

『ポッケンプール家』の時代設定は三皇帝の年(Dreikaiserjahr)1888年と推定できる。ヴィルデンプルッフの『クヴィッツォー兄弟』が初演されたのは11月であり、そのパロディーは、翌1889年4月から上演され、非常な人気を博した。したがって、作品中にあるように、1月のポッケンプール夫人の誕生日に、本物の公演に行くかパロディにするかの話題が出ることは実際にはあり得なかったわけである。この『クヴィッツォー兄弟』の上演がきっかけで、またフォンターネの『五つの城』の刊行もあってであろうが、1890年代、ベルリンでクヴィッツォーの名前は広く人口に膾炙することとなった¹⁹⁾。フォンターネが『ポッケンプール家』に『クヴィッツォー兄弟』を持ち込み、その観劇に大きな意味を持たせたのも、当時の読者にそれが効果的に作用することがわかっていたからである。現代においては、ヴィルデンプルッフは文学史上、完全に忘れ去られた作家となっている。またクヴィッツォー家の存在も歴史の滓に沈んでしまっており、今日の読者には『ポッケンプール家』における劇中劇の意味が十分に理解できないことは非常に残念である。

おわりに

『五つの城』の刊行と『クヴィッツォー兄弟』の初演とがほぼ同時期に重なったのは、ある意味偶然のなせる業であったと思われる。その結果、フォンターネは劇評家としてもクヴィッツォー兄弟と対峙することになり、その体験が『ポッケンプール家』のなかに観劇の場面を持ち込ませることになった。1888年の「クヴィッツェーヴェル」章におけるクヴィッツォーへの正当な歴史的評価と、ヴィルデンプルッフの『クヴィッツォー兄弟』についての好意的な劇評が、1896年の『ポッケンプール家』において再確認あるいは部分的に修正されるというのは、非常に興味深く、言い換えれば、クヴィッツォー兄弟とその時代が長らくフォンターネを引き付ける存在であったといえるだろう。

注

- 1) クヴィッツォー時代に関しては、以下に簡潔にまとめられている。Vgl. Winkelmann, Jan: Die Mark Brandenburg des 14. Jahrhunderts. Markgräflische Herrschaft zwischen räumlicher »Ferne« und politischer »Krise«. Berlin 2011, S.192f.
- 2) Vgl. Bergstedt, Clemens: Die Quitzows im Bild der märkischen Geschichte. Berlin 2011, S.12.
- 3) Fontane, Theodor: Werke, Schriften und Briefe. Herg. von Walter Keitel und Helmuth Nürnberger. München (Hanser Verlag) 1961–1997. (以下略 WS) Abt.III, Bd.3/I, S.274
- 4) Vgl. Fontane: Große Brandenburger Ausgabe. Tage- und Reisetagebücher. 3 Bde. Berlin (Aufbau Verlag) 1994–2012. Hier Bd.2. Tagebücher. 1866–1882, 1884–1898. Hrsg. von Gotthard Erler. Berlin 1994, S.157.
- 5) Fontane: Große Brandenburger Ausgabe. Wanderungen durch die Mark Brandenburg. 8 Bde. Hrsg. von Gotthard Erler und Rudolf Mingau. Berlin (Aufbau Verlag) 1994–1997. Hier Bd.5. Fünf Schlösser. Altes und Neues aus Mark Brandenburg. Berlin 1997. 以下『五つの城』からの引用は、本文中括弧内にページ数のみ示す。
- 6) Vgl. Ebd., S.7.
- 7) Fontane: WS Abt.IV, Bd.4, S.235.
- 8) Ebd., S.246.
- 9) 詳しくは拙稿「エルンスト・フォン・ヴィルデンプルッフの「クヴィッツォー兄弟」」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第34号, 2016）参照。なお地名、人名の表記を若干変更した。
- 10) Klöden, Karl Friedrich: Die Mark Brandenburg unter Kaiser Karl IV. bis zu ihrem ersten Hohenzollernschen Regenten, oder: Die Quitzows und ihre Zeit. 4 Bände. Berlin 1836–37. Hier Bd.2, S.151.
- 11) Vgl. Bergstedt: a.a.O., S.28f.
- 12) Fontane: Große Brandenburger Ausgabe. Theaterkritik 1870–1894. 4 Bde. Hier Bd.3. Kritiken 1883–1894 und weitere Texte. Hrsg. von Debora Helmer und Gabriele Radecke. Berlin (Aufbau Verlag) 2018, S.476.
- 13) Ebd.
- 14) Ebd., S.477.
- 15) Vgl. Fontane: WS Abt.IV, Bd.4, S.635
- 16) Vgl. Müller-Kampel, Beatrice: Theater-Leben. Theater und Schauspiel in der Erzählprosa Theodor Fontanes. Frankfurt a. M. 1989, S.78.
- 17) Fontane: Die Poggenpuhls. WS Abt.1, Bd.4. 以下『ポッケンプール家』からの引用は、本文中括弧内にページ数のみ示す。なお訳出にあたっては立川洋三氏の訳（「ポッケンプール家」三修社1997年）を参考にさせていただいた。
- 18) ヴィルデンプルッフの父親は、フリードリヒ大王の甥として有名なルイ・フェルディナント王子の庶子であった。つまりヴィルデンプルッフは四分の一ホーエンツォレルン家の血を引いていた。
- 19) Vgl. Bergstedt: a.a.O., S.9f.